

「黒人身体能力」と水泳、陸上競技、アメリカンスポーツ

―「神話」の歴史性を検証するための試論的考察として―

川 島 浩 平

序にかえて^①

去る二〇〇九年八月、世界国際陸上選手権ベルリン大会が開催された。この時、なかなかメダルに手が届かなかった日本選手団の中で、閉幕間際になって、尾崎好美が女子マラソンで銀メダル、村上幸史がやり投げで銅メダルを獲得し、メディアの熱い注目を浴びたことは記憶に新しい。とはいえ、これらの荣誉が有終の美というよりはあだ花に見えたほど、全般的な日本勢の不振は否めないものがあつた。日本選手団のメダル総獲得数はこの二つにとどまり、出場国中の二二位と低迷した^②。

対照的に、期待通り、否それ以上の實力を見せつけたのが、短距離走におけるジャマイカ勢であつた。ジャマイカは金メダル七個、銀メダル四個、同メダル二個、合計一三個を獲得し、総獲得数で米国（二二個）に次ぐ堂々二位を

占めた。ジャマイカが人口二八〇万人程度の小国であることを考えれば、この実績には米国のそれを凌ぐ価値があるといってもいいかもしれない。とりわけ一〇〇M走においてウセイン・ボルトが打ち立てた九秒五八の世界新記録は、その名を運動競技史上に刻む快挙であったといえるだろう。

ジャマイカ勢の韋駄天ぶりを目の当たりにした日本人視聴者は、私的・準公的な言説空間⁽³⁾において、その圧倒的強さの原因をめぐって、活発に意見を交換した。そのなかにあつて、ジャマイカ選手の運動能力を生み出す文化的、歴史的要因を究明しようとする一部の努力を圧倒するかたちで、「肌の『黒い』人」「黒人」の強さや速さは生まれつきの要因によるものではないかという、本質主義的な憶測が飛び交ったことは注目に値する。

そしてこれは、今に始まったことではない。一部の陸上競技種目における圧倒的勝利の光景が、「黒人」の「肌の『白い』人」「白人」や「肌の『黄色い』人」「アジア人」に対する本質的な、つまり遺伝的・生理的な優越の表象として広く浸透し、無批判に消費されてきたことは、海外でも国内でも、これまでたびたび指摘されてきたのである⁽⁴⁾。ボルトの快走に象徴されるジャマイカ勢の強さは、こうした大衆社会に流通する表象の現実味を高めるごく最近の事例であつたに過ぎない。

ここで、「黒人」という呼称の定義と、この呼称を採用する理由について若干の説明を施しておきたい。本論は、アフリカに出自を有する人およびその子孫に対する呼称として、英語の「ブラック (black)」に該当する「黒人」を採用する。「黒人」の中でも、一七世紀から一九世紀にかけて全盛を迎えた奴隷貿易によってアフリカ大陸から南北アメリカ大陸へと強制的に移送されたアフリカ人の子孫には、一部のスポーツ競技種目において傑出した役割を果たしてきたものが少なくない。歴史を振り返るなら、これらの人々の呼称として、「ネグロイド (Negroid)」⁽⁵⁾「ニグロ (Negro あらうて negro)」⁽⁶⁾「有色人 (person of color)」⁽⁷⁾「アフリカ系アメリカ人 (African American)」⁽⁸⁾など様々な

表現が用いられてきたことが知られている。いずれも、時代の文脈の中で政治的、学術的、社会的に批判を受けた経緯がある。

本論が採用する「黒人」も、「特定の人間をその個性や差異を無視して、一つの色によって表象される集団に所属するかのごとく記述する」点で、問題なしとはいえない。主要メディアには、この語の使用を禁じる傾向も確認できる。^⑦しかし、「黒人」なる集団の、アメリカ、そして他の地域における社会的リアリティ（現実性）、^⑧およびこれらの地域におけるこの語の幅広い浸透度に鑑み、また、ここでいう社会的現実性を含意しうる表現が他に見出せないという事情を考慮し、以下「黒人」を呼称として採用し、「」をはずして使用するものとする。

さて、本論では上に述べた「本質主義的な憶測」あるいは「黒人の強さや速さは生まれつきの要因による」とする言説を、これまでの拙論で展開した議論に基づいて「黒人身体能力神話」と呼ぶものとする。^⑨この神話は、「黒人はもともとスポーツがうまい」、「生まれつき運動が得意」、「天賦の運動能力や身体能力に恵まれている」、「^⑩天性のアスリートである」などの具体的な表現となつて、一般人の日常的な会話や、ブログやメーリングリストなどインターネット上の準公的な対話の場で、現在でも流通している。その起源を求めるなら、日本においては過去約半世紀、国際社会に舞台を広げるなら約四分の三世紀にまで遡ることが可能である。^⑪

黒人身体能力神話の浸透は、その起源であるアメリカ合衆国（以下アメリカと略す）だけでなく、ヨーロッパやアジア各国でも見られる点で、国際的な視点から検討されるべき課題である。しかし、それがすぐれて日本的な現象であることも看過できない。たとえばアメリカでは、人種主義^⑫に対する警戒や統制ゆえに神話はタブーと化し、少なくとも公的な舞台で認知されることは皆無といってもよい。他方日本では、人種主義に対して比較的鈍感な文化的土壌も手伝って、神話が一方的に承認されることはあっても、批判的観点から俎上に載せられることは減多にない。実際

日本では、指導的立場にあるものでさえ、神話を前提として発言することが多い。たとえば、陸上短距離種目のコーチングでは、『黒人の天性』に対抗するには、日本人は『技能（スキル）』を磨く以外にない』と教えられると聞く。⁽¹³⁾「黒人だから強い」という言説に潜む人種主義を指摘するだけで「褒めてなぜ悪い」、「事実だから仕方ない」といった反論を受けることも少なくない。⁽¹⁴⁾

アメリカにおいて神話の肯定と否定が拮抗し、大きな争点を成してきたことが特徴的であるとするなら、日本において争点の不在性に注意が喚起され、問題視されてきたことは特筆に値する。文献調査や意識調査は、相対的、絶対的いずれの意味においても、きわめて高い割合の若者たちが「黒人」なる集団が固有の運動能力・身体能力を有すると信じていること、そして、その多くが、黒人の運動能力・身体能力に生得的、遺伝的な根拠があると信じていることを明らかにしてきた。⁽¹⁵⁾

ここでは、以上を踏まえて、黒人身体能力神話を研究の対象とするにあたって、次の二つの立場を措定し得ることに注意を喚起したい。

第一は、神話の浸透を国際的な広がりをもつ現象として捉え、その起源と形成・普及の過程をグローバルな視点から解明しようとする立場である。この時、スポーツ大国として、これまで多くの黒人アスリートを産出したアメリカ合衆国の占める役割と位置は重要である。神話の歴史性を検証する作業では、特に一九三〇年代にその起源を求める解釈が有力視されているが、こうした先行研究の成果を視野に入れつつ、さらに踏み込んだ分析が要請されている。⁽¹⁶⁾

第二は、神話の浸透におけるすぐれて日本的な状況に注目する立場である。ここで問われるべきは、神話の歴史性や時代的文脈におけるその性質であると同時に、否それ以上に、「量的」あるいは「比率的」な展開のありかたであ

る。すなわち、グローバルな水準に照らし、「なぜ日本において、かくも無批判に『神話』が受容されるのか」である。¹⁷

本論を取えて位置づけるなら、第一の立場からの検証作業を始めるための舞台を整備し、その意義を明確に提示する役割を担うものでもいえよう。神話の起源を歴史学的に調査する必要性を確認するために、神話が神話に過ぎないことをいくつかの角度から検証したい。つまり、黒人の身体能力とされる性質や現象が歴史的に変容してきた過程における「過日」の黒人身体経験の照射しながら「今日」のそれとの差異を浮き上がらせたり、あるいは「本質的」、「遺伝的」とみなされている性質や現象に実証的なメスをいれることで、その虚構性を暴いたりする作業を通じて、「本質主義的な憶測」や「黒人の強さや速さは生まれつきに要因による」とする言説の根拠を覆す試みを展開してみたい。換言するなら、本論は、日本でとかく普遍的・不変的で、生物学的・遺伝的な根拠を有するものとみなされがちな性質・現象を批判的に考察し、歴史学的な再検討の必要性に注意を喚起することを目的とする。¹⁸

以下において、こうした試みの一環として、まず水泳（競技）における黒人の位置と役割に関する歴史的な転換の可能性を論じ（第一節）、次に陸上競技におけるその優越に関する実証的な分析と比較文化研究の有効性に目を向け（第二節）、現代のアメリカにおける黒人アスリートが置かれた状況と表象を考察した後（第三節）、原点に立ち戻り、第一の立場から検証作業を行う意義を再確認することで本論を結ぶものとする。

I 黒人と水泳（競技）

日本人が人種的な運動能力があるとの前提のもとに、その能力がもたらす差異を意識するきっかけとなるスポーツ

競技の最たるものの一つに水泳がある。統計的なデータによる裏付けはさておき、経験則でみても、人種が水泳の能力や演技のレベルに影響を与え、さらにはそれを決定すると考えている日本人は少なくない。その主たる根拠は、世界選手権やオリンピックのようなハイレベルの国際大会の選手層に、黒人が相対的に不在であることと深く関連しているように思われる。たしかに、次にみる陸上競技種目や、日本人に人気があるベースボール、フットボール⁽¹⁹⁾、バスケットボールなど主要なプロ球技スポーツにおける黒人選手の存在感に比べると、水泳が黒人に疎遠にみえるスポーツであることはまちがいない。

特定の運動競技種目において、黒人が人口比率からみて著しい劣位に甘んじている場合、あるいはその逆に、著しく秀でている場合、その説明を遺伝学や生理学といった個人に本来的に備わっているとみなされる性質を扱う学問の立場から行おうとする努力や傾向が生じることは、これまでも指摘されてきた。⁽²⁰⁾ この場合の前者が本節で扱う水泳であり、後者が次節で取り上げる陸上競技であるといつてよいであろう。要するに、あまりにも顕著な実力や実績上の差異は、努力や訓練を越えた領域に属する与件によって定められているにちがいないとする思考が働くというわけである。

もちろん、オリンピックに出場する黒人選手が全く存在しなかったというわけではない。しかし、かつてその存在が、「黒人は泳げない」というステレオタイプを強化するという皮肉を招いた出来事もあった。二〇〇〇年のシドニー五輪に赤道ギニアの代表として一〇〇M自由形を泳いだエリック・ムサンバーニの場合がこれにあたる。三名からなる予選に出場したムサンバーニは、他二名がフライングで失格したため、一〇〇メートルを一人で泳ぎ、結果的に同予選の勝者となった。しかしそのタイムたるや一分五二秒七二という、出場選手の平均タイムの二倍を優に上回る珍記録であった。その上彼の泳力や泳法は、特にレースの後半、疲労も手伝ってか、オリンピック代表選手のもの

は思えないような素人レベルに落ち込んだため、全世界の視聴者の同情的な失笑を買う結果となったのである。⁽²¹⁾ 通称「うなぎのエリック」の泳ぎぶりは、その後度々バラエティ番組などに登場した。その画像が、はからずも「泳げない黒人」という印象を強化したことは想像に難くない。

ムサンバーニの経歴とその後を少し調べれば、彼が水泳を習い始めてわずか八カ月しか経っていなかったこと、四年後のアテネ五輪までに自己記録を大幅に短縮し五七秒を切るまでになったことなど、彼の泳者としての逸材ぶりを示す証拠を入手することもできたであろう（ビザ問題で結局アテネ五輪には不出場）。しかし、数限りない視聴者のうち、その労を厭わなかったものはほんの一握りだったのではなからうか。

もともと「黒人は泳げない」というステレオタイプは、日本起源のものではなく、それが通俗的人種言説として深い根をおろしていたアメリカから伝播したとみなすべきかもしれない。黒人と水泳の関係に関するアメリカ人の考えを窺わせるエピソードの一つに、いまは亡きアフリカ系女優ネル・カーターが、七万人の大観衆に向けて放ったジョークがある。時は一九九〇年六月三〇日、場所はロサンゼルスメモリアル・コロシアムでのこと、南アフリカで釈放されたばかりのネルソン・マンデラの講演を聴きに集まった、大半がアフリカ系アメリカ人からなる観衆に向かって、カーターはこう言った。「水泳は『非黒人的（non-black）』な競技である。なぜなら、もし黒人が泳ぎを知っていたなら、奴隷として酷使された祖先たちがアフリカに泳ぎ去ってしまい、この国にアフリカ系アメリカ人が残っているはずもないから……」⁽²²⁾ ジョークの出来の良否はさておき、ここではそれが大観衆に受けたということが肝要である。受けたということは、「水泳＝非黒人的」という了解が成立していたことを示唆する。

ロサンゼルス・ドジャースのゼネラル・マネージャーであったアル・カンパニスは、カーターが「非黒人的」という婉曲な表現でほめかした、黒人に優れた泳者が少ない理由を、もつとぶしつけない物言いだ説明しようとしたため

に辞職に追い込まれるという憂き目にあった。一九八七年、黒人初のメジャーリーグとされるジャッキー・ロビンソンのデビュー四〇周年の年、テッド・コッペルがキャスターを務める人気ニュース番組「ナイトライン」に出演した際に、カンパニスは臆することもなく、黒人が水泳に向いていない理由は、その身体が「浮力」を欠いているからだと言ったのである。⁽²³⁾ ジャッキー・ロビンソンがモントリオール・ロイヤルスというドジャースの二軍チームの選手だった時代のチームメイトであり、その後も黒人選手のよき理解者として定評のあった球団管理職の口について出た言葉は、コッペルを仰天させ、本人がおそらく予想さえしなかった批判の嵐を視聴者の間に巻き起こした。二日後に解雇された彼は、汚名をそそぐ機会を与えられることもなく、その一年後に生涯を閉じることになる。

黒人は水泳が苦手との印象を補強するかの発言が、著名な黒人アスリートからたびたびなされてきたことも、神話の形成と浸透に一役買ったのではないかと思われる。スポーツ界の英雄による証言の影響力は、当人の運動能力が高ければ高いほど、カリスマ性が強ければ強いほど大きかったにちがいない。一九三〇年代から四〇年代にかけてボクシングヘビー級界に君臨したジョー・ルイスも極端な水嫌いでは知られるが、⁽²⁴⁾ 最近の例として、一九九二年五月に『プレイボーイ』誌が掲載した、バスケットボールの寵児マイケル・ジョーダンとのインタビューを見ておこう。

ジョーダンは当時、シカゴ・ブルズでの初優勝、バルセロナ五輪出場の決定を経て、人気の絶頂に到達しつつあった。インタビューは、彼の公人、私人としての生活の様々な側面を掘り起こしながら、話題を水泳へと切り替える。

そこで読者は、「俺は泳げない。水に触るのもやだ」(I can't swim and I ain't messing with the water)、「だれにだって弱みはある、俺にとってそれは水だ」(Everybody's got a phobia for something. I do not mess with water)など、かなり強い語調の言葉を目にするようになるのである。インタビューをきちんと読むなら、ジョーダンの水嫌いが、幼少期に友人が溺死するという不幸な事件に巻き込まれたことによるものであることがわかる。⁽²⁵⁾ しかし、一九九〇

年代を通じて、彼が黒人身体能力の「権化」として祭り上げられるにつれて、彼の「弱み」が個人の性質以上の一般性を帯びることになったとしても不思議ではない。

では、水泳競技のトップ選手層に黒人が相対的に不在である理由について、いかなる実証的な説明がなされてきたのか。黒人コミュニティにおける、とりわけ児童・学童に対する水泳のための機会・施設の相対的欠如、その結果としての泳力の相対的未発達、根底にある原因としての人種主義（水を通じて異人種と肌を触れ合うことに対する嫌悪感等）など、スポーツ社会学の教科書におなじみの解説は、改めて繰り返すまでもないだろう。また、最近の社会学研究に注目すべき成果も少なくないが、ここでは、神話の歴史性を検証することの意義に注意を喚起するという本論のねらいに則して、歴史学的立場からの再検討を試みたい。なかでも、水泳と潜水を事例として、特定の人種・民族集団があるスポーツ的な活動に抜kindでた実力を発揮する場合の歴史的文脈の重要性を説いた、ケビン・ドーソンの近著は特筆に値する。

ドーソンは、近著の冒頭でこう切り出している。

西アフリカ海岸地域あるいは内陸部の人間がまだ一人たりとも、奴隷にされたり、海外に強制輸送されたり、新大陸の空の下で強制労働に就かされたりしていなかったころ、アフリカ人の多くは熟達した泳者そして潜水夫であった。……やがてアメリカ大陸に輸送された奴隷たちは、アフリカで培ったこの技能を持ちこみ、その後数世代に渡って仕事や余暇の時間に、それを大いに活用したのである。大航海の時代から一九世紀を通じて、アフリカ系の人々の水泳と潜水の能力は、ヨーロッパ系の人々のそれをはるかに凌ぐものだった。²⁶⁾

続いてドーソンは、史料に基づき、水泳を不得手とする黒人表象に曇らされた目には斬新で挑発的にさえ映る、水泳の過去に関する事実を次々と明るみに出していく。近現代のヨーロッパ人、とくに女性が、そして水夫でさえ水泳を不得手としたこと⁽²⁸⁾。大航海の時代以後、オランダ、フランス、そしてスコットランドの探検家がガーナ、セネガル、ガボンなどの地で目撃した、アフリカ人の驚異的な泳力、泳法、肺活量について⁽²⁹⁾。新大陸の植民地で奴隷たちが見せた超人的な水泳と潜水の能力について⁽³⁰⁾。そして主人の命を受け、あるいは自発的に、ジョージア、カロライナ、西インド諸島の海や河川で鱈、鯨、鰐などと闘ってこれを容易く射止めた奴隷たちについて等々⁽³¹⁾。

ドーソンの歴史研究は、こうして「過日」の水泳と潜水の世界が「今日」のそれと大きく趣を異にし、現在の「劣等者」が過去の「優越者」であった様子を、実証的かつ写實的に描き出すのである。そこで黒人は、白人よりも上手で早い泳者であり、より深く、より長く水中に留まることのできる潜水夫であった。ここに見られる、水泳し、潜水する人々の過去と現在における逆転の構図は、今日一つの人種・民族集団が苦手であるときみなされている身体技法において、かつて同じ集団が他者に抜きんで勝り、その実力を遺憾なく発揮し、人種や階級の壁を越えて他者から惜しめない称賛や報奨を受けていたことを伝える。ここから私たちは、特定の身体的な技法や演技（パフォーマンス）が「人種化」される際に、歴史的、文化的、環境的要因がいかに重要であるかを読み取るべきである。

一九世紀以後、水泳と潜水の世界にいかなる変化が起きたのかは、歴史的かつ社会学的課題である。実際の検証は今後の研究を待たなければならないが、およその筋書きを予想することはそう困難ではない。一言で述べるなら、水泳と潜水の「再人種化」が起り、黒人の身体技法が白人のそれへと転換したのである。その背景に、中産階級の出現と余暇の発見、水泳、日光浴、海水浴のレジャー化、肌の露出に関するタブーの解除、新しい身体観、美観、習慣、マナー、そして女性観の構築、水泳の競技化と国際大会の開催、そして人種主義的社会の構造と秩序の中での海岸、

湖岸、プールなどからの黒人の締め出しなど、多様で広範囲に及ぶ社会的かつ文化的な条件の成立がみられたことはいうまでもない。

Ⅱ 黒人と陸上競技

陸上競技は、本節で取り上げる長距離・短距離種目いずれの場合も、一九世紀以降、水泳とは正反対ともいえる道筋をたどってきた。水泳において、往年の黒人身体技法が白人化したのであるとしたら、陸上競技においては、往年の白人競技が黒人化したといっても、史実をさほど単純化したことにはならないであろう。こうした変容の事実そのものが、人種・民族集団とスポーツ競技との相性が歴史的に構築されること示唆している。長距離種目では、私たちはケニアとエチオピアを代表格とする東アフリカ勢の優越を見慣れている。他方短距離種目では、西アフリカ諸国の代表とは限らないが、西アフリカを出自とする人々の勝利を当然視するまでになっている。しかし、今日の陸上界で黒人選手の不在を想像するのが難しくない、一世紀前の陸上界で黒人選手が存在を想像することは困難だった。

往年の白人競技が黒人化する歴史的变化のプロセスを、もう少し詳しく見てみたい。一九世紀末の近代オリンピック誕生の時代において、陸上競技は、近代スポーツの諸々の種目のなかで際立って、人間の身体そのものの優劣を競う場としての象徴的な役割を担わされていた。欧米諸国の人々は代表選手に「白人（アーリア人）の優越」の証明となる勝利を期待し、選手はこれに応えた。その結果、初期五輪大会の陸上競技は白人男児の独壇場という観を呈した。⁽²⁾しかし一九二〇年代になると、「アーリア人の優越」を脅かす存在が、短距離種目を中心に登場し始めた。黒人オリンピックの黎明期であり、身体能力神話形成の前夜である。このころから徐々に、こうした、「白人男児の聖域」へ

表：陸上各競技種目世界記録保持者（2010年1月18日現在）

Distance	Athlete	Time	Ancestry
100m	Usain Bolt(JAM)	9.58	West Africa
110m hurdles	Dayron Robles(CUB)	12.87	West Africa
200m	Usain Bolt(JAM)	19.19	West Africa
400m	M. Johnson(USA)	43.18	West Africa
400m hurdles	Kevin Young(USA)	46.78	West Africa
800m	W. Kipketer(KEN)	1:44.11	East Africa
1000m	Noah Ngeny(KEN)	2:11.96	East Africa
1500m	E. Guerrouji(MOR)	3:26.00	North Africa
Mile	E. Guerrouji(MOR)	3:43.13	North Africa
3000m	D. Komen (KEN)	7:20.67	East Africa
5000m	K. Bekele(ETH)	12:37.35	East Africa
10000m	K. Bekele(ETH)	26:17.53	East Africa
Marathon	H. Gebrselassie(ETH)	2h03:59	East Africa

の新参者に対する形容辞として、「スピードがあってもスタミナはない」とする言説が重宝されるようになった。この表現には、「野獣のような」瞬発性や爆発力を有していても、「持続的な時間枠の中で、駆け引きに勝るための戦略を講じるだけの知的能力に足りない」という判断や期待も込められていた。⁽³³⁾ところが一九五〇年代になると、人種主義的解釈は再び修正を受けることになる。スタミナを兼ね備えて長距離種目で勝るアフリカ系の選手が出現すると、それまでに巷で囁かれていた「黒人は生まれつき身体能力に勝る」との説がもてはやされ、身体能力神話が全盛期を迎えるのである。⁽³⁴⁾

かつての白人競技が黒人化するプロセスの詳細な検討は、別の機会に譲るものとするが、現在、この変容が完遂されたとみなしうる状況にあることは指摘しておきたい。データは、陸上競技主要十三種目（最短の一〇〇Mから最長のマラソンまで、走行距離と障害物の有無によって規定される十三の種目、表参照）における二〇一〇年一月時点での世界記録保持者とする。王者たちは、短距離五種目（一〇〇M、一〇〇Mハードル、二〇〇M、四〇〇M、四〇〇Mハードル）ではいずれも西アフリカ出自（ジャマイカのU・ボルト、キューバのD・ロブレス、アメリカのM・ジョンソンとK・ヤン

グ)、中距離五種目(八〇〇Mから三〇〇〇Mまで)では東・北アフリカ出自(ケニアのW・キブケテル、N・ゲニ
ーとD・コーメン、モロッコのE・エルゲルージ)、長距離三種目(五〇〇〇Mからマラソンまで)では東アフリカ
出自(エチオピアのK・ベケレとH・ゲブルシラシエ)である。³⁵⁾短距離が西アフリカ出自に、長距離が東アフリカ出
自に集まるなど興味深い偏りが見られるにせよ、記録保持者全員がアフリカ出自であるとみなせることを確認できる。
前節で述べたように、こうした集中現象の解釈に、人々は水泳の場合と同様、好んで遺伝・生理学的な本質主義論
を採用しようとしてきた。日本人の場合、特にその傾向が顕著であるといつてよい。オリンピック、世界陸上など、
多民族・多人種の代表が集う速さの限界への挑戦の舞台にこそ、黒人身体能力神話の原点の一つがある。日本のロー
カルな文脈をみるなら、お正月恒例の箱根駅伝が果たす役割も見落とせない。日本人走者をごぼう抜きするアフリカ
人留学生の快走が、お屠蘇気分のお茶の間に与えるインパクトもまた、神話を浸透させる原動力の一つである。³⁶⁾

では、黒人の陸上競技種目における優越を歴史的、文化的に分析するには、どうしたらいいのか。まず、長距離走
の場合を検討しよう。スポーツ地理学者J・ベイルや運動生理学者Y・ピツィラディスらは、異なる角度から、東ア
フリカ勢が長距離走力で優位に立つ原因を分析している。しかしいずれも、選手たちを生んだ歴史的経緯や文化的背
景を重視する点で共通している。二人は、ドーソンが水泳を事例として取り組んだ身体技法への文化・歴史的なアプ
ローチを、長距離走行を対象として実践してきたといえるだろう。いずれも、本質主義の誤謬を告発し、実証的な手
段によって強さの原因を探る必要性を訴えている。強引な一般化やステレオタイプを避け、選手たちの生い立ちや経
験を具体的に精査することによってのみ、正しい理解が得られると説くのである。ここでは、ベイルとピツィラディ
スの論点のうち、次の二点に絞って考察する。

第一は、主としてベイルの説によるものである。それは、優秀な選手の属性をどのレベルで捉えるかという問題と

関わっている。三〇〇〇Mの覇者コーメンや五〇〇〇Mの覇者ベケレは、黒人として、ケニア人あるいはエチオピア人として、他の人種や国民に勝る人間として表象され、それゆえ人種的、国家的な優位が含意されてきた。しかし人種にせよ国家にせよ、これらは便宜的あるいは政治的に構築されたカテゴリーであり、その中に包含される人間の性質を統一的に規定するものでないことは自明である。こうした人為的なカテゴリーの中に、多くのエスニック集団が存在し、さらに、一つのエスニック集団の中に、言語、住環境、生活習慣などの共有によって細分化される人々がいる。こうして細かく分割した人間集団を単位として検討することで、はじめて長距離走での勝利を可能にする原因が明らかになる。⁽³⁷⁾

ケニア人の場合、国際級トップレベルの長距離走者一九七名中の一四一名（一九九二年）は、リフトヴァレーと呼ばれる高原地方に居住するカレンジンというエスニック集団の出身者である。そして、カレンジンの中でもナンディという下位集団が、トップランナーの圧倒的多数を占めている。⁽³⁸⁾ 換言すれば、国際級のトップランナーは、ケニア人であっても人口の多いナイロビ地方や、北東地方、海岸地方の出身者からは一人も輩出されず、カレンジンであつても、ケリチョーやキシーなどの地区に居住する下位集団とはほとんど縁がない。結局のところケニアの強さは、概ねナンディの走力によるものであるということになる。

ナンディの優越を説明するには、この集団が有する文化的な特質と、同集団を育んできた歴史的條件に目を向けなければならぬ。まず文化的な特質として注目すべきは、ナンディの誇り高さである。「われわれはナンディなり、他の人間は無に等しい」「ナンディは、あらゆる非ナンディなるものに優越する」という意識が同集団にみなぎり、人々の強い自意識と気位の高さを象徴している。また、かくも強固な自尊心が、ケニアの民族集団でもっとも長期に渡るイギリス帝国とのゲリラ戦を持続させたともいわれる。

誇りと自尊心が長距離走に必要な精神力の源泉だとするなら、長距離を疾走し続けるための頑健な身体と強靱な脚力を作り上げたものは、このナンディに特有の社会的な構造と秩序であるといわれる。なかでも民族集団を経済的に存続させるために不可欠な資源としての牛を、他の民族集団から強奪する仕組みが果たした役割が重視されてきた。

ナンディによる強奪行為は、内密性とスピードを旨とする。二〇人かそれより少数の男性からなる強奪団は、夜間目指す牛の群れを求めて一〇〇マイル以上も移動し、牛を獲得すると速やかに、追手に気づかれる前に、牛を追いたてながらの帰路につかなければならない。家で待つ人々は、強奪を完遂した男児たちを称え、英雄として迎え入れる。危険とストレスにあふれた往復の行程を走破するには、人並みはずれた走力と持久力が不可欠である。強い脚力と心肺機能を有する若者ほど、成功する確率が高かったことはいうまでもない。強奪による経済行為の幾世代に及ぶ歴史が、長距離走で勝つために必要な資質を有する若者を多数抱くエスニック集団に、ナンディを仕立て上げたといえるかもしれない。⁽³⁹⁾

それでは、優れた長距離走者を育むための歴史的、文化的な条件に恵まれたナンディたちの中で、いかなる要因が特定の個人を、陸上競技の世界大会で栄冠をつかむ地位に押し上げたのであろうか。第二の論点は、ピツイラディスらの調査に由来するもので、この問いに答える上で多くの示唆に富むものである。この調査は、経験の蓄積に、つまり幼少期に積んだ走行訓練の量に大きな意義を見出している。⁽⁴⁰⁾

調査はケニア人走者の人口統計的な比較を目的とし、アンケートによって四〇四人の中・長距離種目（八〇〇Mからマラソンまで）のトップレベルの選手と、八七名の対照群から、出生地、言語、通学手段と通学距離に関する情報を集めている。選手は、実力や実績の差異によって、国内（相対的下位）レベルと国際（相対的上位）レベルの二つに区別される。その結果は次の通りである。多くの回答者（対照群二二％、国内レベル七三％、国際レベル八一％）

は走って通学したと答え、レベルの高いアスリートほど走って通学したものが占める割合が大きい。また、レベルの高いアスリートほど通学距離が一〇キロメートル以上であるとするものが占める割合が大きい⁽⁴⁾。以上から、ケニア人の長距離走での勝利は、神秘的な天性の才能の賜物などではなく、学童期に長い距離を走って通学したという、後天的な鍛錬と努力の成果である可能性が高いとの結論を導くことが可能となる。

短距離種目において西アフリカ出自の選手が好成績を収め、世界ランキングの上位層を独占していることはすでにみたとおりである。ベルリン大会でのジャマイカ勢の活躍は、黒い肌のアスリートの優越を私たちが最近目撃したほんの一例であるにすぎない。四年間のうち三年は、夏場になると五輪大会か世界陸上で「世界一速い人間」をめざす黒人走者の競い合いが行われ、お茶の間の日本人はその光景を見せつけられる。その時に単純明快で直観的に受け入れやすい、遺伝的、生理的な先天的差異を人種間に想定する本質主義的な解釈を、私たちが選択したくなるのも無理からぬことである⁽⁴⁾。さもないと、世界のトップランナーに日本代表選手が敗北を喫し続ける理由が、練習や訓練の不足にあることになりかねなくなる。しかしそう考えることを望む視聴者はほとんどいないであろう。

それ以外に、環境要因によって、あるいは文化的、歴史的な観点から、黒人短距離走者の優位を説明できるだろうか。残念なことに、長距離走者に関する研究に見られるような成果の蓄積を、短距離走者に関して期待することはできない。黒人スプリンターの強さ、速さの原因を解明しようとする努力は、まだ端緒にいたばかりであるから⁽⁵⁾。

しかし、有効なアプローチの方向性を示唆することは可能である。たとえば、スポーツ文化の比較研究は、ある国家の選手が特定の競技種目に抜群の成績を収め得る原因を、相対的、複眼的に捉える視座を提供してくれる点できわめて有効である。ジャマイカとドミニカ共和国を例にとって検討してみよう⁽⁴⁾。これら二国家は、ヨーロッパの植民地支配からそれぞれ長い闘争を経て独立し、今日スポーツが主要産業の一つとして経済を支えるほどのスポーツ大国と

して発展してきた点で、またカリブ海に浮かぶ島国として比較的隣接している点で、歴史的、政治・経済的、地理的に少なくない共通性を有している。最も長い期間宗主国であったのは、ジャマイカはイギリス、ドミニカ共和国はスペインであり、それゆえ母語は英語とスペイン語であるなど、重要な相違点も存在する。とはいえ、民族的な構成に注目すると、安易な比較は許されないといえ、いずれも国民の九割近くがアフリカ系の血を受け継いでいるとの調査もあり、その意味での類似性を認めることもできる。

だが、こうした共通性や類似性にもかかわらず、それぞれの国が得意とする競技種目は明らかに異なっている。ジャマイカは陸上短距離王国であり、ドミニカ共和国はベースボール大国である。ジャマイカの最近にして最大の英雄はウセイン・ボルトであるが、もちろん、ジャマイカの強さはボルト一人によるものではない。五輪メダル記録を紐解けば、ジャマイカが、陸上競技だけで通算金メダル一三個、銀メダル二四個、銅メダル一五個を獲得してきたことがわかる。人口わずか二八〇万の国家にとって、見事な記録である。ドミニカ共和国は、対照的に、すべての競技種目を合わせても通算で金メダル二個、銀メダル一個、銅メダル一個を勝ち取ったにとどまる。その理由の一つは、ドミニカ共和国が運動の才能をベースボールに注ぎ込んできたからである。同国は、アメリカに次ぐメジャーリーガーの輩出国として名高い。M・ラミレス、D・オルテス、V・ゲラーロ、P・マルティネスなど、今日もっとも輝いている現役選手にドミニカ出身者は少なくない。

今仮に、日本を代表する短距離走者がドミニカ共和国に、同じレベルの野球選手がジャマイカに移籍したと仮定してみよう。それぞれの国では、黒人選手をはるかに凌ぐ「黄色い」肌の短距離選手と野球選手の出現が話題を呼ぶことになるだろう。そこに果たして、黒人身体能力神話が存続する余地があるだろうか。「黄色人」身体能力神話がこれに代わって流通するであろうか。ここから先は想像に任せるしかないが、ある国家という文脈において、黒人であ

ることがスポーツにおける優越の必要条件でないことは明らかである。

ジャマイカとドミニカ共和国のスポーツの経験は、それぞれイギリスとアメリカの強い文化的影響の下に蓄積されてきた。二つの国家のスポーツ文化の形成と運動能力の発現は、本質主義によつてではなく、本論が重視する文化的・歴史的アプローチによつてのみ説明が可能であることはいうまでもない。

ジャマイカとドミニカ共和国は、それぞれに特有な歴史的環境のなかで形成されたスポーツ文化のなかで、運動選手の才能を育成してきた。スポーツ文化を支える制度的な柱は、家庭・家族であり、学校であり、地域社会である。これらの制度を通じてそれぞれの国民が児童や学童を教育し、スポーツに勧誘し、優秀者を奨励し、報酬を与えてきた、その仕組みと方法を精査しない限り、ジャマイカ短距離選手の強さやドミニカ野球選手の活躍の秘密を明らかにすることは不可能である。

Ⅲ 岐路に立つアフリカ系アメリカ人アスリート⁽⁴⁵⁾

スポーツの技能や実践における人種的優越を歴史的、文化的観点から解明しようとする立場から、現在のアメリカスポーツ界を観察するなら、「黒人アスリート黄金時代」が「終焉」するかもしれないという、多くの人にとって予想外と思われる可能性も見えてくる。

まず、大学スポーツ界の今日の動向を、アフリカ人・アフリカ系泳者の往年の栄光や、ケニア・エチオピア代表選手の長距離種目およびジャマイカ代表選手の短距離種目における今日の成功、あるいはドミニカ共和国出身のメジャーリーガーの卓越を考察してきたのと同じ観点から捉えてみたい。つまりそれは、アフリカ系アメリカ人アスリートの

今日（あるいは過日）における優位や有力さとみられてきた現象を、歴史的な変容の一過程として読むことである。実際、二〇世紀を黒人アスリートの台頭と全盛の時代とするなら、二一世紀はその衰退期であるのかもしれない。社会学者H・エドワーズが、かつて警鐘を鳴らしたのは、まさしくこの「危機」⁴⁶に対してであった。

それは、次のようなものである。まずエドワーズはこう指摘する。「大学レベルでのスポーツの動向を見よう。一般には提案四八号と呼ばれる、正式には全米大学体育協会（NCAA）規則一四条三項によって、黒人アスリートは苦境に追い込まれている。制定後の二年間（一九八四年―一九八六年）に、同規則によって学力面で大学への入学が不適格と判定されたバスケットボール選手の九二%と、フットボール選手の八四%は黒人だった。」さらに彼はこう続ける。「もちろん、同規則によってもたらされた改善の意義を否定するつもりはない。しかし、こうした改善点は、深刻な悪影響からみればとるに足らないものである。なかでも、もっとも憂うべきは黒人高校生が失った教育の機会であり、アスリートとしての将来を夢見ていた若者に『提案四八号の犠牲者』という汚名を着せてしまったことである。」また「統計は、大学バスケットボール一部リーグのほとんどすべての技能レベルが低下していることを示している。」以上からエドワーズはこう結論する。「スポーツ界と社会における現在の傾向を逆転させるべく対策が講じられない限り、後になって黒人スポーツ参加の全盛期として振り返ることになるかもしれない時代の終焉を、私たちは目撃していることになるだろう。」

アメリカ大学スポーツ界への外国人留学生の流入は、エドワーズの危機感を別の角度から裏付ける兆候である。大学教育界の広報誌として名高い『高等教育クロニクル』は、最近、大学スポーツ界で外国人留学生が果たす役割が高まっていると報告する。曰く、

全米大学体育協会一部リーグに所属する大学チームは、海外から才能あるアスリートを受け入れることによって、その実力を高めている。……同リーグの選手に占める外国人選手の割合は、この一〇年間で二倍になった。……コーチたちは、自分たちは海外に頼らざるを得ないと主張する。その理由は、優れた選手がもう国内には見当たらないからである。コーチのなかには、海外に直接足を運んだり、スカウトを派遣したりするものもある。キャンプバスのオフイスと海外を結ぶ、インターネットに頼るのはもちろんのことである。スポーツアカデミー産業の急成長によって、幼少期からアメリカで訓練を積むアスリートの卵も増え、その中から選手をリクルートするコーチもいる。だが、こうした動向を憂えるコーチもいる。外国人に頼りすぎると、アメリカ人の若者に奨学金を与えられず、大学教育への道を閉ざしてしまうことになりかねないからである。⁽¹⁷⁾

エドワーズが「危機」とみなす現象は、大学スポーツ界に限られたわけではない。プロスポーツにおいても、たとえば、かつて「黒人スポーツの華」とされたバスケットボールにおいてさえ、カナダ、ヨーロッパ諸国、そしてアジアからの外国人選手の存在が目立つようになった。一時期、日本人選手田臥勇太のNBA（全米プロ・バスケットボールリーグ）入りが話題になったが、彼の挑戦もまた、こうした変化の一端を担っていたのである。むしろ日本からの有力選手の流出は、バスケットボール界に限られたわけではない。むしろベースボールにおいて、最有力選手が次々とメジャー入りに名乗りを上げてきたことは、周知の通りである。⁽¹⁸⁾ 反対に、黒人メジャーリーガーは減少の一途をたどり、その比率は、かつて四人に一人といわれたのが、今では一〇%を切る⁽¹⁹⁾ところまで落ち込んでいる。ボクシング世界ヘビー級王者の勢力図の塗り替えも、過去二〇年間に劇的に進化した。二〇世紀初頭以来、ジャック・ジョンソン、ジョー・ルイス、モハメド・アリ、マイク・タイソンら伝説的王者が名を連ね、武勇伝に事欠かなかったこ

の競技種目においてさえ、今日アフリカ系アメリカ人は、舞台を降りてしまったかの観さえある。一九九〇年前後に、ボクシング主要四組織であるWBO、WBA、WBC、IBFのヘビー級王者はすべてアメリカ人でかつ黒人だった。二〇一〇年一月現在、そのすべては非アメリカ人であり、かつそのうちの過半数が非黒人である⁵⁰⁾。

黒人の身体に与えられる文化的意味づけが変容する可能性を示唆する舞台は、アマやプロの現実のスポーツ界に限られていたわけではない。ハリウッド映画における表象と言説もまた、そこに投射された黒人身体解釈や意味づけがここ二〇年間に大きく揺れ動き、変化したとみられる領域として興味深い。ここでのいう変化とは、衰退や消滅といった一方向に還元されるような単純な変化ではない。そうではなく、黒人の身体性や知的能力が、それまで主流であったイメージや概念と順接や逆接、あるいは補完など多様な関係性のなかに、再構築されるという現象がみられたのである。

より具体的に述べてみたい。最近のハリウッド映画に見られる黒人の身体性に関する言説や表象は、身体能力神話を一辺倒に補強するのではなく、むしろ、脱神話をめざす方向で、アフリカ系アメリカ人のより現実的で、複雑な能力のあり方とその発現形態を反映させようとする、制作側のなんらかの意図に裏打ちされてきているように思われる。その具体的な方法は、第一に、身体性と知性を共存あるいは融合させることによって、そして第二に、黒人の知力、指導力、あるいはクラシック音楽のような芸術分野の才能そのものに力点を置くことによって⁵¹⁾。

第一の分野、つまり身体性と知性との共存・融合への指向や方向性を有する作品としては、古い順に、『ザ・ダイバー (Men of Honor)』(二〇〇〇年)、『小説家をみついたら (Finding Forrester)』(二〇〇二年)、『コーチ・カーター (Coach Carter)』(二〇〇五年)などがある。『ザ・ダイバー』は、海軍潜水夫長 (マスター・ダイバー) をめざす若い黒人青年とその教官の対立と相互理解をテーマとする作品である。黒人青年は優れた身体力 (幼少期からの

抜群の水泳力や、息を止める競争で同期生や遂には教官さえ負かすほどの心肺能力として表象される」と知力（貧困による就学不足のハンディを克服して、成績で同期生を上回る学力として表象される）を兼ね備えた人物として描かれている。『小説家を見つけたら』は、あるバスケットボールの天才少年に隠されたもう一つの才能（文才）を、ブロンクスに蟄居するビュリツァー賞作家が見つけ出し、体力ではなく知力を生かすことのできる作家としての進路を歩む決心をさせるまでの物語である。『コーチ・カーター』は、ある高校バスケットボールチームのコーチが、落ちこぼれの選手たちに、勉強することの意義を教え、大学進学への道を切り開かせるといふ実話に基づいた作品である。いずれも、黒人を主人公や主たる登場人物として設定し、各人の知的能力の発達と成熟を描き出すことによって、黒人身体能力神話に挑戦しているといえるだろう。

第二の分野に該当する作品としては、若い白人ゴルファーを導く黒人キャディーを主人公とする『バガー・ヴァンスの伝説 (Legend of Bagger Vance)』(二〇〇〇年)、高校アメフトチームを優勝に導く優れた指導者を描く『タイタンズを忘れない』(二〇〇〇年)、精神障害を患いながら路上生活をする黒人の、チェロ奏者としての才能に焦点をあてた『路上のソリスト (The Soloist)』(二〇〇九年) などがある。

以上のような映画作品は、現実のスポーツ界の動きと連動するかのように、ハリウッドのスポーツシネマにも、黒人身体能力とみなされてきた性質や現象の再解釈を迫るような配役の転換や、性格描写における力点の移動などが起きていることを示唆する。映像による表象と現実との関係性は、慎重に検討すべき課題である。とはいえ、現代社会における身体能力神話を考察する際に、映像表象の意義と影響力を過小評価することは不可能である。

むすびにかえて

本論は、日米両国において、程度の差があるとはいえ、黒人身体能力神話が社会に浸透してきたことを随所で示唆してきた。イギリス人社会学者ケビン・ヒルトンの次の指摘は、神話が、イギリスでも広範に影響を及ぼしている現状を物語るものである。

我々がスポーツで発揮する才能と実力は、身体的あるいは精神的な意味で「自然的な」差異として頻繁に記述される。その結果、運動能力が得手・不得手という言葉が創られ、こうした言説は、結局のところ、一つの経路をたどって「害のない」人種的差異へ還元される。アフリカ系アメリカ人の四〇〇メートル走者M・ジョンソンや、ジャマイカ人の元サッカー選手のG・クルークスらは、テレビ番組で気のきいた知的な発言をする。バルバドス人で障害馬術競技の名手O・スキート、インド人の現代ダンス演出家D・S・ビュラー、T・ウッズ、跳躍力に優れたすべての白人男性、映画『ベッカムに恋して (*Bend It Like Beckham*)』の主役たちのようにサッカーがうまいすべてのインド系イギリス人女性たち、こうした人々は、広い社会にみられる多様性がもたらす現実を伝え、ステレオタイプとの矛盾を提示する。にもかかわらず、スポーツの人種化された社会的構造は、我々が自己と他者のアイデンティティを形成し経験する上で大きな影響を及ぼし続けている⁽³²⁾。

しかし、ヒルトンの慧眼に敬意を払いつつも、私たちは悲観主義に陥らないよう留意する必要がある。むしろ今こそ、将来にむけて建設的な努力を開始しなければならない。スポーツの社会的構造が人種化されているとはいえ、本

論が示してきたように、それは固定的でも普遍的でもなく、むしろ柔軟で可変的である。「序にかえて」で定義した第二の立場からの研究調査は、歴史的文脈が異なれば、身体性や運動能力に関する人種化の性質や程度が大きく異なることを明らかにしている。第三節が指摘した、最近のアメリカスポーツ界にみられる「脱黒人化」およびスポーツシネマにおける言説や表象の変容と、別の調査が明らかにしてきた、多くのアメリカ人学生がみせる神話に対する旺盛なまでの批判力との間に因果関係があるとするなら、黒人身体能力の受容にみられる日本人のナイーブなまでの従順さも、教育の政策や報道の方針次第で、制限され、修正され得るだろう。

本論がこの可能性を現実に近い近づけるための、ささやかな一歩を刻むものとなることを期待したい。

(注)

(1) 本論冒頭に位置する本節に限って、執筆の時期を同じくした『京都大学文学報』に発表予定の拙論「日本社会における『黒人身体能力神話』の受容―『人種』／『黒人』という言葉・概念との遭遇とその習得を中心に―」と重複する記述が少なくないことを断わっておく。立論のための舞台設定の役割を果たす序論的な節として、二つの拙論が多くの論点を共有することがその理由である。後節の内容が全く異なるものであることはいうまでもない。

(2) ベルリン大会の公式記録は、次にみるジャマイカ勢の場合も同様、TBS放送のホームページを参照、[http://www.tbs.co.jp/seriku/] (二〇一〇年一月一八日現在)。

(3) 公的な言説空間にも「神話」は浸透している。例えば、拙稿「黒人身体能力神話」浸透度の文化的格差をさぐる―概念規定と方法論を中心に―『武蔵大学人文学会雑誌』第四〇巻第四号(二〇〇九年三月)の、特に第四節で紹介する主要新聞記事からの引用などを参照のこと。しかしマスメディアの一部、とくにNHKテレビ放送などは、人種主義に対して強く警戒する姿勢を取っており、ここでは敢えて「公的」とは言わないこととする。日本人のこの問題に関する「本音」(私的、準公的空間での意見)は、インターネットの検索エンジンで「黒人身体能力」をキーワードに検索してヒットする多数のサイトから知ることができる。

(4) 国内における本質主義的な憶測の横行については、本論の注で言及する拙稿などで詳しく論じている。海外の事情についての調査や報告は非常に多いが、たとえばアメリカ合衆国に関しては、以下を参照。David K. Wiggins, "Great Speed But Little Stamina: The Historical Debate

Over Black Athletic Superiority," *Journal of Sport History* 16 (Summer 1989): 158-185; Patrick B. Miller, "The Anatomy of Scientific Racism: Racist Responses to Black Athletic Achievement," *Journal of Sport History* 25 (Spring 1998): 119-151; Mark Dyreson, "American Ideas about Race and Olympic Races from the 1890s to the 1950s: Shattering Myths or Reinforcing Scientific Racism?" *Journal of Sport History* 28 (Summer 2001): 173-215. 1) ら「スポーツ史研究」掲載の論文は「いずれも無料でオンライン講読が可能である」[http://www.la84foundation.org/5va/history_fmst.htm] (11010年一月一八日現在)。

(5) Johann Friedrich Blumenbach, *De generis humani varietate nativa* (On the Natural Varieties of Mankind), MD thesis at University of Göttingen, 1776.

(6) これらのいずれの呼称を採用するかは、アメリカ人の間においても合意がみられないようである。筆者は北米スポーツ社会学会 (North American Society for the Sociology of Sport, NASSS) で発表者の呼称に注目してみたと1)ら、"African American" が最も多かったが、"people of color" や "black(s)" も少なからず用いられていた。教室など公の場では African American を用いるのが一般的だが、私的な場では black(s) が好んで用いられる傾向がある。

(7) バラク・オバマが大統領選挙に勝利した直後、日本の新聞報道の見出しには「黒人初の大統領」との形容辞が頻出した。しかし一週間もすると、「黒人」という語句は、オバマ関連記事から急速に姿を消すようになった。例えば日経新聞のオンライン検索エンジンである「日経テレコ」で検索すると、オバマと「黒人」という表現を両方用いている記事が、当選が決定した2008年一月五日から六日に集中して掲載され、その後急激に減少する傾向を確認することができる。

(8) 「現実」や「現実の」という日本語よりも、主体である個人が「現実的であると感じている」という主観性を強く含意する言葉として「リアリティ」「リアルな」を用いる。このニュアンスを伴う英語の "real" をうまく表現する日本語が見当たらないので、少々きこちなくなるとの批判を覚悟の上で「リアリティ」「リアルな」と表記する。

(9) 拙稿「黒人身体能力神話」浸透度の文化的格差をさぐる、「黒い肌の「異人種」との遭遇——『黒人身体能力神話』浸透度の文化的格差をさぐるための序論的考察として——」『武蔵大学総合研究所紀要』第一八号(2009年六月)、「人種表象としての『黒人身体能力』——現代アメリカ社会におけるその意義・役割と変容をめぐって——」竹沢泰子編『人種の表象と社会的リアリティ』第一章、岩波書店(2009年)、および注一で言及した出版予定の『京都大学人文科学』などを参照。

(10) 「運動能力」と「身体能力」という二つの概念はどう区別されるべきだろうか。運動能力を、スポーツ(運動競技)をおこなう能力を意味するものとも一般的な概念であるとするなら、身体能力は、「フィジカルな力」などとも言え換えられ、スポーツを行う能力のうちの身体に直接関連、または由来する部分を強調した概念である。もう一歩踏み込んでいえば、運動能力がスポーツを実践する能力の文化的、環境的要因に由

来する側面も包含するのに対し、身体能力はその本性的、生得的側面を特化させる概念であるともいえよう。

(11) 日本において一九六四年に開催された東京五輪が神話形成の一つの契機であったことを示唆する証拠は少なくない。国際社会においては、以下に述べるように一九三〇年代に黒人表象の劇的な変容があったとする解釈が今日主流になりつつある。

(12) 「人種」という概念の実在性が、各方面から批判的に検討されてきたことは周知の通りである。しかし英語で“race”や“racism”が普通名詞として用いられている現状に鑑み、本論も「」をはずして記述するものとする。

(13) 筆者が筑波大学大学院や東海大学に学んだ元短距離スプリンターから聞いた話では、トレーニングの現場では、黒人アスリートに天性の才能があることはむしろ当然視され、この点を疑問視する風潮は皆無であるという。末続慎吾が二〇〇三年にパリで開催された世界陸上選手権で銅メダルを獲得した当時は、彼の走りが日本古来のナンバ走法的应用であるとされ、日本人の技能が黒人の天性に勝る日が近づいた証拠としてもてはやされた。

(14) 大学の授業でたびたび「黒人は天性のアスリートである」との発言に潜む人種主義の可能性を指摘したことがあるが、当惑し、反感さえ抱く学生が少なくない。そのような学生が口にする反論としてもつとも多いのがここに紹介したものである。

(15) 黒人に固有の運動能力があるとの想定が言説空間に存在する点で共通しているとはいえず、日本人はそれをほぼ無批判に受け入れているのに対し、アメリカ人は争点として俎上に載せているという点に差異があることに、今一度注意を促したい。これは、黒人という「人種」の表象が、文化的文脈に応じて、異なるかたちで受け入れられていることを意味する。つまり逆にいえば、「人種」概念を支える言説と表象が、文化的に規定され、構築されているということである。こうした論点ゆえ、本研究は、人種概念の社会的構築性を検証する作業として位置づけることが可能である。人種概念の社会的構築性を検証する作業の代表例に、京都大学人文科学研究所を拠点とする「人種の表象と表現をめぐる学際的研究」(代表竹沢泰子)がある。その業績に、竹沢泰子編著『人種概念の普遍性を問う―西洋的パラダイムを超えて』人文書院(二〇〇五年)および『人種の表象と社会的リアリティ』などがある。

(16) この立場に立つ研究として筆者は、科学研究費補助金による基盤研究C「アメリカ合衆国における黒人身体能力神話およびスポーツへの固執と対抗言説・戦略」および武蔵大学総合研究所助成プロジェクトA(研究テーマ「アメリカ合衆国における運動能力・身体能力の人種間格差に関する言説・表象とその社会的影響」)に取り組んでいる。後者が日本における神話の受容を踏まえた上で、アメリカにおける受容と批判的拮抗関係が及ぼす社会的影響に焦点を当てるのに対し、前者はアメリカにおける批判側の対抗言説・戦略が、神話をいかに覆そうとしているかを分析することをねらいとしている。

(17) 拙稿「『黒人身体能力神話』浸透度の文化的格差をさぐる」、「黒い肌の『異人種』との遭遇」「黒人身体能力神話」浸透度の文化的格差をさぐるための序論的考察として」「日本社会における『黒人身体能力神話』の受容」「人種」/「黒人」という言葉・概念との遭遇とその習得を中心

に―」など、これまで発表してきた、あるいは発表予定の拙稿はすべてこの第二の立場からのものである。次にも述べるが、本論は第一の立場からの論文の嚆矢をなすものであり、その意味でもタイトルにある通り「試論」である。今後は二つの立場からの研究調査を同時に進め、身体能力神話の形成と伝播の歴史を解明したい。

(18) 本論は、出版を計画中の新書で展開する予定の議論の一部を先取りしたものである。黒人身体能力の存在を当然視する風潮が強い日本では、この神話の争点性にさえ気づいていない人も少なくない。そのような人をも対象としていかに争点であることを伝えるのかは、新書の大きな課題の一つでもある。本論への反応は、新書の執筆に役立てたいと考えている。

(19) 国際社会で「フットボール」といえば、イギリスを起源とし、四年に一度に開催されるワールドカップで競う競技のこと（日本でいうサッカー）を指すが、アメリカで「フットボール」といえば、アメリカンフットボールを指す。ここでは「フットボール」を両義で用いている。つまり、日本人は、アメリカンフットボールにせよサッカーにせよ、そのどちらにも黒人選手が存在感を強く感じているので、両義で用いることが可能である。

(20) 例えばアメリカでスポーツ社会学の教科書として広く用いられている、ジェイ・コークレーの著作にも、同様の指摘がある。次を参照。J. Coakley, *Sports in Society* (New York: McGraw Hill 19th edition) 2006).

(21) ムサンバーニの力泳は、YouTube上の、次の画像でも見る事ができる。[http://www.youtube.com/watch?v=3zJCc_VyxM4] (二〇一〇年一月一八日現在)。映像は、ムサンバーニが出場したシドニー五輪の予選の実況中継である。「同情的な失笑」とは、ムサンバーニが登場したバラエティ系の番組数本をみた筆者が、記憶を総合した結果に基づく解釈であるが、このYouTube映像に流れるアナウンサーと解説者のやりとりからも、類似した反応を感じ取ることが可能である。

(22) 本文でこのあとで紹介するケビン・ドーンソンの歴史研究で言及されている。次を参照。Kevin Dawson, "Enslaved Swimmers and Divers in the Atlantic World," *The Journal of American History*, vol. 92, no. 4 (March, 2006), 1354.

(23) カンパニスの問題発言を、ネット上で聞くことが出来る。ABC放送のホームページから「ナイトライン・クラシック」にアクセスすること [http://abcnews.go.com/Nightline/Video/playerIndex?id=3034970] (二〇一〇年一月一八日現在)。同じインタビュで、カンパニスは少し前に、「黒人には指導者になるために必要な資質がない」とも発言している。これも彼の管理職キャリアにとって、「浮力がない」と同じくらい深い致命傷となった。

(24) Lauren Rebecca Sklaroff, "Constructing G.I. Joe Lois: Cultural Solutions to the 'Negro Problem' during World War II," *The Journal of American History*, vol. 89, no. 3 (December, 2009): 958-983.

(25) "Michael Jordan: a candid conversation with the NBA's in-flight demigod on life after magic, basketball's ego wars and his guarantee for

Olympic gold." *Playboy*, May 1992. オンラインで読む(日本語で読む)。

[<http://www.basketballvuurwerk.nl/nba/michaeljordan/playboy.htm>] (二〇一〇年一月一八日現在)。

- (26) Donald W. Hastings, Sammy Zahran & Sherry Cable, "Drowning in Inequalities: Swimming and Social Justice," *Journal of Black Studies*, vol. 36, no. 6 (2006): 894-917; C. C. Irwin, T. D. Ryan & J. Drayer, "Urban Minority Youth Swimming (In)ability in the United States and Associated Demographic Characteristics: toward a Drowning Prevention Plan," *Injury Prevention*, vol. 15, no. 4 (August 2009): 234-239; Gitanjali Saluja, Ruth A. Brenner, Ann C. Trumble, Gordon S. Smith, Tom Schroeder & Christopher Cox, "Swimming Pool Drownings Among US Residents Aged 5-24 Years: Understanding Racial/Ethnic Disparities," *American Journal of Public Health*, vol. 96, no. 4 (April 2006): 728-733 443。

- (27) Dawson, "Enslaved Swimmers..," 1327.

- (28) Theodorius Bailey Myers Mason, "The Preservation of Life at Sea: A Paper Read before the American Geographical Society, February 27th, 1879" 443。オンラインで読む(日本語で読む) [http://www.archive.org/stream/preservationlif00masogoo#page/n0/mode/1up] (二〇一〇年一月一八日現在)。

- (29) アフリカ人の水泳力、潜水力について証言を残している探検家に、オランダ人 Pieter de Marees Pieter van den Broecke、William Bosman、フランス人 Jean Barbot、スコットランド人 Mungo Park などがいる。いずれも一次資料を残している。これらの探検家を扱った二次資料も多くが、水泳や潜水についての言及はつく限られつつある。これらの探検家の活動とその時代を、比較文化的視点から扱った研究に次がある。Michel Duquet, "The Timeless African and the Versatile Indian in Seventeenth-Century Travelogues," *Journal of the Canadian Historical Association*, vol. 14, no. 1 (2003): 23-44. [http://www.erudit.org/revue/jcha/2003/v14/n1/010318ar.pdf] (二〇一〇年一月一八日現在)。

- (30) アメリカ植民地での奴隷の水泳や潜水についての証言を残した人物には、イギリス人 George Pinckard と Richard Ligon などがいる。Pinckard が残した史料に、"Notes on the West Indies: Written During the Expedition Under the Command of the Late General Sir Ralph Abercromby: Including Observations on the Island of Barbadoes, and the Settlements Captured by the British Troops; Upon the Coast of Guiana." (London: Longman, Hurst, Rees, and Orme, 1806) "Ligon 244-249"。"A true and exact history of the island of Barbadoes, 1647-1650" 449。

- (31) 奴隷と海や川に棲む動物や魚との闘いを観察した人々に、サウス・カロライナの William Elliott、ジョージアの R. Q. Mallard、イギリス人 John Lawson などがいる。"Mallard の回想録 Plantation Life before Emancipation" [http://docsouth.unc.edu/fpn/mallard/menu.html] 449。Lawson の日誌 *A New Voyage to Carolina* [http://docsouth.unc.edu/nc/lawson/menu.html] 449。これら二冊共に、オンラインで読む(日本語で読む)。

ったことができ。二〇一〇年一月一八日現在

(32) この時代の人種理論については Thomas F. Gossett, *Race: the History of An Idea in America* (New York: Oxford University Press, [New Edition] 1997) を、運動競技との関わりについては Mark Dyreson, *Making the American Team: Sport, Culture, and the Olympic Experience* (Urbana: University of Illinois Press, 1998) とくに第五章を参照。

(33) Wiggins, “Great Speed But Little Stamina” は、運動能力の人種主義的解釈の歴史をたどる論文で、とくに「瞬発力はあるが持久力がない」との説が有力だった時代に注目し、同論文のタイトルにこの表現を用いている。

(34) Miller, “The Anatomy of Scientific Racism” は、注三十三の Wiggins 論文と類似した目的で書かれているが、人種主義に対するさらに強い告発を含んでいる。

(35) 表のフォーマットは次の文献によるものを基にしている。Yannis Pitsiadiis & Robert Scott, “The makings of the perfect athlete,” *Lancet*, vol. 366 (2005): 516-517. この論文に掲載されたデータは二〇〇五年当時のもので二〇一〇年一月時点のものに更新した。ピツィラデスとスコットは “Ancestry” と表記している概念について特に説明していない。ここでもそれに準じている。しかし「出自」と訳しているこの概念に問題がないわけではないことに留意しておきたい。つまり、それぞれの世界記録保持者が純粋に記述されている地域のものだけを先祖とするわけではなく、その中には、アフリカ以外の地域出身者を祖先に有するものが少なからず含まれているのである。ある人の出自を、こうした「混血」の問題を考慮に入れながらいかに表記するかは今後の課題である。

(36) 「序にかえて」で述べた第二の立場に立つ研究調査でおこなったアンケートと聞き取りの結果は、インフォーマントの大学生たちが黒人身体能力神話を受け入れる上で箱根駅伝が果たした役割が大きかったことを強く示唆している。

(37) John Bale & Joe Sang, *Kenyan Running: Movement Culture, Geography and Global Change* (London: Frank Cass, 1996). 以下、第一の論点は主としてこの文献に拠っている。

(38) エチオピアについて本論では詳しく論じないが、ケニアの場合にナンディへの絞り込みが可能のように、エチオピアの場合はアルシ (Arsi) 地区の住人に絞り込みが可能である。ペイルとサンクは、人口一人あたりの優れた運動選手（世界ランキング上位一〇〇位に入る選手）輩出率を表す指数を用いて、国家やエスニック集団の比較を行っている。この指数で見ると、世界を一・〇〇とした場合アフリカ大陸全体は一・〇六、アフリカ諸国をみると、ケニアは六・〇三で二位の南アフリカ（二・五四）を引き離して圧倒的首位となる。ケニアを一・〇〇として、ケニア国内を地域別にみると、リフトヴァレーが三・七で、二位のニヤンザ（〇・六）を引き離して圧倒的首位、リフトヴァレー地方内をみると、ナンディが二・一九で、二位のバリング（四・六）を引き離して圧倒的首位である。このように、ケニア内にも幾重もの偏りの構造がある。

(39) ナンディの歴史と文化については、次の文献も参照。John Manners, “Raiders from the Rift Valley: cattle raiding and distance running in

- east Africa.” in Yannis Pitsiadiis, John Bale, et al. eds. *East African Running: Toward a Cross-Disciplinary Perspective* (London: Routledge, 2007): 40-50.
- (40) Onywera, V. O., Scott, R. A., Boit, M. K. & Pitsiadiis, Y. P. “Demographic characteristics of elite Kenyan endurance runners”, *Journal of Sports Sciences*, vol. 24, no. 4 (2006): 415-22.
- (41) Robert A. Scott, et al., “Evidence for the ‘Natural’ east African athlete,” in *East African Running*, 260-262.
- (42) 世界国際陸上選手権大会がオリンピックのない年に二年に一度開催されるため、オリンピックを合わせると、四年のうちの三年は、夏場に陸上競技の大規模な国際大会が開催されていることになる。
- (43) 短距離走に比較して長距離走の研究が、より多く蓄積されてきた理由の一つは、長距離走が心肺能力という医学・病理学的に関心の高い領域とかわるからであると思われる。
- (44) ドミニカ共和国ベースボールについては次を参照。Rob Ruck, *The Tropic of Baseball: Baseball in the Dominican Republic* (Bison Books, 1999); Alan M. Klein, *Sugarball: The American Game, the Dominican Dream* (New Haven: Yale University Press, 1993). シヤンペカと陸上競技については次を参照。Patrick Robinson, *Jamaican Athletics: A Model for 2012 Olympics and the World* (Arcadia Books, [reissue edition] 2009).
- (45) アフリカを出自とする人々の呼称が多様であり、歴史的に変化してきたことは「序にかえて」でも述べた。第三節はアメリカの黒人をとくに焦点としているので、あえて「アフリカ系アメリカ人」をタイトルとする。
- (46) Harry Edwards, “Crisis of black athletes on the eve of the 21st century,” *Society*, vol. 37, no. 3 (2000): 9-13. 拙稿『「ダーウィンス・アスリート」のその後一〇年—アメリカにおける人種とスポーツの間—』『スポーツ社会学研究』第一六巻(二〇〇八年)一一一—一四頁も参照。
- (47) Robin Wilson & Brad Woleveron, “The New Face of College Sports,” *Chronicle of Higher Education*, vol. 54, no. 18 (January 11, 2008), A27. なおこの記事の翻訳として次を参照。宮田実「アメリカの大学スポーツにおける外国人の台頭—『高等教育クロニクル』の記事より—」『大阪産業大学論集人文・社会科学学編』四、一五七—一六四頁。
- (48) その中でも傑出する鈴木一朗のメジャーデビュー前後の事情については次の拙稿を参照。『“SUZUKI”から“ICHIRO”へ:二〇〇一年アメリカ・メジャーリーグ序盤戦における鈴木一朗(イチロー)とメディア報道』『武蔵大学人文学会雑誌』第三四巻第二号(二〇〇二年十一月)。
- (49) 佐山和夫『大リーグを超えた草野球サッチとジョシュの往くところ』彩流社二〇〇八年。
- (50) 一九八九年五月六日から一九九二年二月一日までに主要四組織のヘビー級王座についたものは、M・タイソン、J・B・ダグラス、E・ホーリーフィールド、R・マーサー、M・モラー、R・ボウら六名であり、すべてアメリカ人かつ黒人である。二〇〇七年六月二日から現在

まで同四組織のヘビー級王座を占めたのは、S・イブラギモフ（ロシア）、W・クリチコ（ウクライナ）、S・ピーター（ナイジェリア）、R・チエガエフ（ウズベキスタン）、N・ワルーフ（ロシア）、V・クリチコ（ウクライナ）、D・ヘイ（イギリス）ら七名であり、アメリカ人は一人もおらず、黒人はピーターとヘイの二名のみである。

(51) ハリウッド映画についての解釈は、主として拙稿「人種表象としての『黒人身体能力』」に依拠している。

(52) Kevin Hylton, *Race and Sport: Critical Race Theory* (Routledge, 2008), 1.